

テキストデータを用いた
経済学部新入生の
満足と不満に関する分析
——2017年新入生アンケートの集計結果——

柴 田 淳 子
毛 利 進 太 郎

神戸学院経済学論集

第49巻 第4号 抜刷

平成30年3月発行

テキストデータを用いた 経済学部新入生の 満足と不満に関する分析

—2017年新入生アンケートの集計結果—

柴 田 淳 子
毛 利 進 太 郎

1. はじめに

神戸学院大学では、2014年より「学生の満足度の高い大学」づくりに取り組み、2015年は教育力の向上や教育のパラダイムシフトに重点を置き、2017年にはさらなる教育の充実とキャンパス環境の充実に力を注いでいる。経済学部においても、学生の満足度を高めるために様々な取り組みを行っている。

我々は、2015年から実施している経済学部新入生を対象としたアンケート調査を通して、高校での学習状況や進路の決定時期、さらに学生生活における不満を調べてきた。これまでのアンケート調査から、数学と社会の各科目の履修状況や、高校の情報教育の内容などが明らかになった。これらの情報は、1年生の関連する開講科目の学習内容を組み立てる上で役立つと考えられる。また、2016年のアンケートでは学生生活の満足度を5段階評価（5：満足している、4：やや満足している、3：どちらともいえない、2：やや不満を感じている、1：不満を感じている）で調査した結果、「どちらともいえない」の37%に次いで、「やや不満」と答えた学生が34%であった。さらに、2015年および2016年の学生が回答した「これまでの学生生活に関して不満に感じること」の自由

テキストデータを用いた経済学部新入生の満足と不満に関する分析

記述データを用いてテキスト分析を行った。それにより夏季休業が短いことなど複数の知見が得られたが、これらを今後の教育活動に役立てるためには不十分であった。そこで、2017年のアンケートでは、学生が満足・不満に感じることに焦点を当て、その対象を「講義」と「学校生活」の2つに分けることで、より具体的な知見を得ることを目的とする。

2. 学生生活の満足度

2017年度「入門演習」においても、2015年および2016年と同様「経済学部に入学者に関するアンケート」を実施した。実施日は2017年7月18日（火）、有効回答数は313名であった。2017年の新入生は383名であり、81.7%の回答が得られた。

まず、2016年と2017年アンケートで実施したこれまでの学生における満足度の割合を図1に示す。ただし、2016年アンケートでは満足度を5段階評価で実施したが、2017年は4段階評価（4：満足している、3：やや満足している、2：やや不満を感じている、1：不満を感じている）と設定した。2016年の結果において「3：どちらともいえない」が一番多かったことと、本論文の目的を踏まえ2017年アンケートからはこの項目を取り除いた。

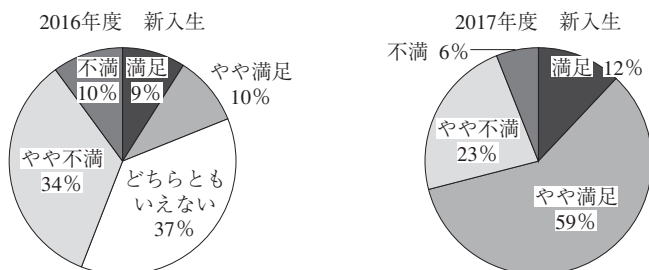


図1：これまでの学生生活への満足度（左：2016年，右：2017年）

2017年の結果から、約71%の学生が満足・やや満足していると答えているが、残りの約29%は不満を感じていることが分かる。これらは、これまでの学生生

活に対して、総合的にどのように感じているかを示した結果である。そのため、満足していると答えた学生は不満を感じていることがないと言うわけではない。また、2017年の結果は、2016年の結果と比較して不満・やや不満を感じている学生の割合が小さくなっているが、その理由が明確ではないため今後もアンケートを実施し、その傾向を調査する必要がある。

次に、各入試区分における満足度ごとの割合を図2に示す。

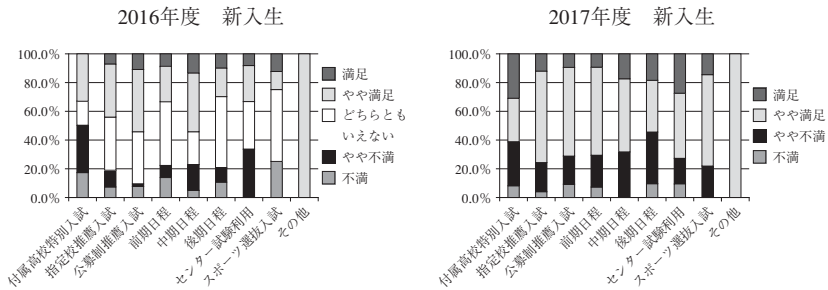


図2：各入試区分における満足度の割合（左：2016年，右：2017年）

附属高校特別入試と2017年の後期日程において、不満・やや不満を感じると答えた学生の比率が他の入試と比較して、やや高くなっている。ただし、これらの入試で入学する学生の人数は他の入試と比べて非常に少なく、ここ2年分のデータから毎年の傾向で結論を決定付けることは不十分である。そのため、来年度以降のデータと比較しながらその傾向を見る必要がある。

3. テキストマイニングの結果とその考察

ここでは、学生が講義と学校生活に関して満足・不満に感じることを自由記述したテキストデータの分析を行い、その結果と考察を述べる。今回の調査では、満足・不満に感じるものの対象を「講義」と「学生生活」に設定したため、

- ① 講義に関して、満足していること
- ② 講義に関して、不満に感じていること
- ③ 学生生活に関して、満足していること

テキストデータを用いた経済学部新入生の満足と不満に関する分析

④ 学生生活に関して、不満に感じていること

の4つの分析を行う。テキストマイニングにはKH Corderを用い、クラスター分析による結果をデンドログラムで図3および図4に表す。図中、語の左に表示している括弧の中の数字は、その出現頻度を表している。また、出現頻度の左に表示している数字は、各クラスターの番号を表している。ここで、クラスター分析の抽出法はWard法、クラスター間の距離はJaccard距離を適用した。同義語とみなしうる語（「ポーアイ」、「ポートアイランド」、「KPC」など）は、同義語と処理した。まずは、講義に関して満足・不満に感じる結果を図3に示す。

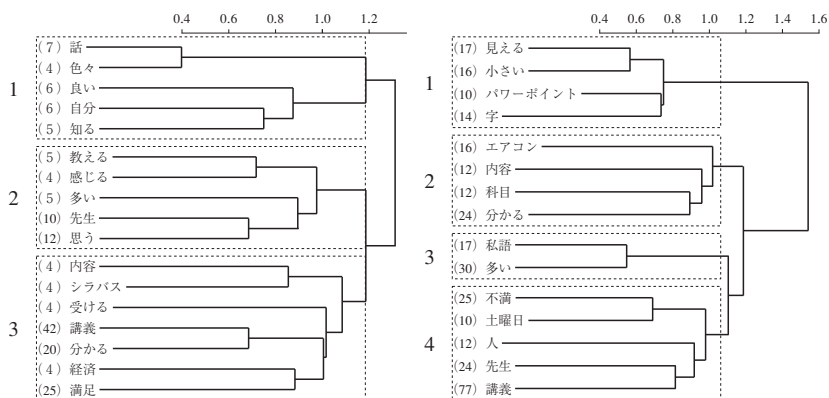


図3：講義に関するクラスター分析の結果（左：①の場合，右：②の場合）

図3の①の結果から、満足している内容は、第1クラスターが学生自身、第2クラスターが教員、第3クラスターが講義の進め方を示していると解釈できる。具体的には「色々な先生の話をとくさん聞いて自分が知らない社会の経済の仕組みなど、それぞれの先生の特徴で勉強できて満足しています」、「シラバス通りに進む講義が多く、学習の計画が立てやすいこと」などの意見があった。同様に、不満に感じている内容は、②の結果より、第1クラスターは板書などの補助教材、第2クラスターは講義室の設備、第3クラスターは講義環境、第4

クラスターは講義の曜日を示していると解釈できる。具体的には、「パワーポイントの字が小さすぎて、前の席でも見えない」、「エアコンの効く部屋と効かない部屋の差が激しい」、「講義中、私語が多い学生が目立つ」などの意見があった。図3に関しては、出現頻度から分かるように②の不満を感じる意見の方が多かった。

次に、学校生活に関して満足・不満を感じることを図4に示す。

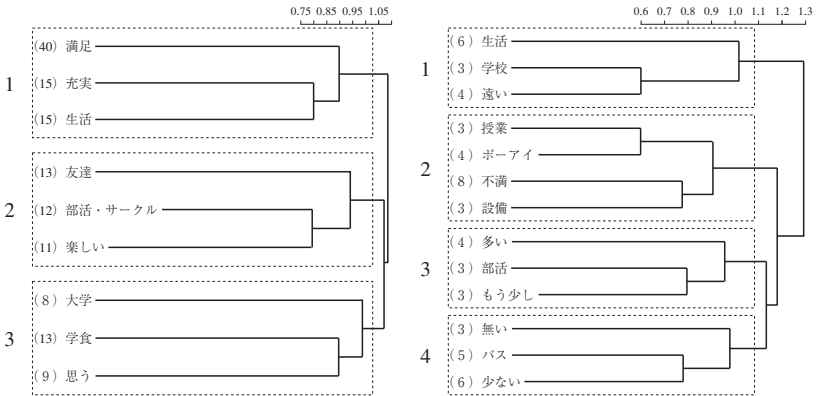


図4：学生生活に関するクラスター分析の結果（左：③の場合、右：④の場合）

図4の③の結果から、第1クラスターは生活そのもの、第2クラスターは友人関係と課外活動、第3クラスターは大学の施設（学食）に関する内容であると解釈できる。具体的には、「友達がたくさんでき、毎日が楽しい」、「大学の設備もかなり充実していて満足しています。」などの意見があった。不満に対する④の結果から、第1クラスターは大学までの距離、第2クラスターはポーアイキャンパスとの比較、第3クラスターは課外活動、第4クラスターは通学手段（バス）に関する内容であると解釈できる。具体的には、「ポーアイとの設備の差が不満」、「駅から遠く、バスの本数が少ない」などの意見があった。図4に関しては、その出現頻度より③の満足している意見の方が多いことが分かる。

4. おわりに

本論文では、2017年度の新入生に対して経済学部1年生対象のアンケートを実施し、これまでと同様に高校での学習状況と学生が講義と学校生活に関して満足・不満に感じることを調査し、その分析結果を述べた。

自由記述データを用いたテキストマイニングの結果から、学生が満足している内容を具体的に示した。講義に関しては、経済学を学ぶことで学生が学問に興味を持ち、その知識を得ることに満足感を得ている。学校生活に関しては、課外活動への参加、親しい友達ができることで満足感・充実感を得ている。反対に、不満を感じている具体的な内容は次の通りである。1年生が受講する講義の多くは大人数の講義であるため、講義に関する不満はそれに起因していると考えられる。学校生活は、通学バスの問題が通学のストレスになっている。

経済学部1年生の実態調査は、これまで3年にわたり実施してきた。今後も1年生対象のアンケート調査を行うことで、学生がスムーズに学修、および学生生活が送れるような環境を整えることができると考えられる。

参 考 文 献

- [1] 神戸学院大学 (<http://www.kobegakuin.ac.jp/>)
- [2] 柴田淳子, 毛利進太郎, “経済学部1年生アンケートの集計結果報告”, 神戸学院大学経済学論集, 第48巻, 第1-3号, p. 59-67, 2016。
- [3] 伏木田稚子, 北村智, 山内祐平, “テキストマイニングによる学部ゼミナールの魅力・不満の検討”, 日本教育工学会論文誌 36 (Suppl.), p. 165-168, 2012。
- [4] 松河秀哉, 齊藤貴浩, “データ・テキストマイニングを活用した授業評価アンケートフィードバックシステムの開発と評価”, 日本教育工学会論文誌 Vol. 35 No. 3 p. 217-226, 2011。
- [5] 松村真宏, 三浦麻子, “人文・社会科学のためのテキストマイニング”, 誠信書房, 2009。
- [6] KH Corder (<http://khc.sourceforge.net/>)